

被虐待体験を持つ20代母親との3年にわたる面接過程

— 母子生活支援施設における心理職の在りようの一例として —

Providing Psychotherapy for an Abused Patient in an Institutional Setting: A Case Study

関根 美知子

Michiko Sekine

福山 清蔵

Seizo Fukuyama

<Abstract>

This case study reports the process of a three-year long psychotherapy by the author in Mothers and Children's Home.

Psychotherapy typically separates daily life from psychotherapy. This distinction, however, was difficult to maintain at the Mothers and Children's Home due to the lack of structure. Instead, a more flexible approach was adopted.

This paper describes one case of clinical psychology in order to examine psychotherapist. Several recommendations are offered to improve the effectiveness of the psychotherapist in this setting.

Key words: psychotherapy, abuse experience, mothers and children's home

I. はじめに

今回論考する事例は筆者が母子生活支援施設にて3年にわたり面接を行ってきた事例である。一般に心理面接においては、クライアントの内的変容を保障するため日常生活場面と面接の場を明確に分ける面接構造が重視される。しかしながら、本事例の場合、クライアントの生活の場にこちらから出向むく、という特殊な側面を持つ。当然面接場面だけでなく、面接の前後、施設での行事、日常場面でクライアントと顔を合わせる。必然的に面接構造が緩くなるわけだが、その分クライアントとの距離の取り方、さらに面接の進め方には十分な工夫が必要とされた。また、施設自体がクライアント—セラピストを支えるもうひとつの枠としての機能を果たしたが、これは大きな支えであると同時に面接を深めていく上での限界ともなった。

施設で心理臨床活動を行う場合、伝統的な心理臨床の枠組みを踏まえつつも、それに囚われない柔軟な枠付けへ考え方をシフトしていけるかどうか、心理職としての仕事の進行を大きく左右する。言い換えるなら従来の心理臨床モデルを新たな「場」での活動にやや強引に適用

するのではなく、「場」ならではの特殊性を、いかに事例に生かせるか、ということだ。「治療」という心理面接の一側面の捉え方も、新たな枠組みの中で捉え直すことが必要になるろう。

筆者は文部省活用調査研究委託事業の初期からスクールカウンセラーとして「学校」という「場」に関わり、心理臨床のあり方は「場」への属性なしにはありえない事を肌身に感じてきたものである。そのことは筆者の個人的経験のみならず、公立学校への配置が10年を超えた今、多くの臨床家により明らかにされている。

一方、母子生活支援施設での心理臨床の経験知はまだまだ浅い。よって筆者自身の検証の意味も含め本事例を論考したい。そして施設利用者へのサービスの質の向上を考えた時、心理職が果たせる役割について幾許かの示唆を導き出したいと考えるものである。

Ⅱ 事例Yの提示

相談対象者：Y 相談開始時23歳（子…A子3歳）

家族構成：父（40代）、母（40代）、妹（19歳）、弟（12歳）

生育暦：母18歳でYを出産。アルコール依存症、精神科通院歴あり。父は職業不定。

小4より全寮制の病弱養護学校へ転学、初等部卒業後家に戻るが盗み、家出、妹への暴力などがみられ、小児精神病院の閉鎖病棟へ入院する。その後すぐに問題行動は消失。病院で幼少期からの母親の虐待が発覚し両親も引き取る意志がなかったため、児童養護施設へ措置される。高校卒業後、いったんは就職するが一ヶ月で退職。街で知り合った男性と同棲を始める。妊娠がわかると出産を反対され男性とは決別、その後は音信不通。Yは女性センターへ一時保護される。妊娠中は生活保護を受けアパートで一人暮らし、婦人保護施設にてA子を出産。その後当母子生活支援施設に入所する。

1 相談開始までの経緯

X年4月：当施設に初めて心理療法担当職員（以下心理職員とする）2名が配置される。

X年9月：心理職員に欠員が出たため筆者が着任。週一回2時間勤務。

職員構成：施設長1名、母子・少年指導員5名、非常勤職員3名、心理職員2名（後に1名退職）

X年10月：施設長よりYへの心理面接の依頼がある。

週一回50分、施設内の相談室にて面接を持つ。

子ども（以下A子）に対しては館内保育室にてプレイセラピー（他の心理職員が担当）を行なう。（A子のプレイセラピーはX+2年3月末心理職員の退職により終了、通常保育に切り替えられる。）

Yの担当母子指導員との間で、方針を話し合う。Yの心理面での問題は生育暦を見ても根が

深いことが予想された。一方現在のYの自我は年齢に比しかなり未熟な状態にあり内面的な気づきを早急に促すような面接を持てば、面接が中断するかもしれないが現実生活を更に崩してしまう可能性があった。よって子どもの養育のことも考え、ゆっくりとしたペースで面接を進めること、また当面の目標を就労とし、Yの心理状態に沿って現実生活の立て直しを進めながら、未熟な自我を育てていくことを考えた。そしてY自身が内的な問題の解決のためより専門的な「治療」を望むようになった場合には面接構造が確保される外部治療機関へつなげる方向性も視野に入れることを申し合わせた。職員からの現状報告では、部屋に籠もっていることが多く、保育園を休ませ親子で寝ていることもあるので職員が声をかけ送り迎えを行っていること等が話された。就労に関しては、きちんとした勤めは無理だと思われたので、作業所のようなところはどうかといくつか紹介したが、プライドが高く行く様子はまったくなかったとのことであった。

A子の様子：ニコニコと愛くるしく、事務所のアイドル的存在。挨拶や身の回りのこともきちんとできる。体つきもしっかりしている。明朗活発、利発な子どもという印象。

2 面接経過の概要

2-1 第一期「社会的引きこもりからの脱却」（X年11月～X+1年12月）

～就労がYの自我を育んでいく～

1) 概観

初回面接時のYは、少女のようで服装も子どもっぽい。とはいえ、若々しさも感じられない。印象は「幽霊」のよう。エネルギー少なくふわふわとしてつかみ所がない。表情も乏しく能面のようにであった。

一方、話の筋はしっかりしている。最初は言いよどみ、こちらが辛抱強く待つとぼつぼつと、目線をややはずして話し出す。話し出すと止まらなくなるので、筆者（以下Th）が時間を見て話を切るようにした。話される内容はショッキングなものも含まれたが、情感が感じられずただ言葉だけが流れていくようであった。

当初目的としていた就労は早い時期に果たされ、喜々として仕事に行く様子が職員より報告される。危なげながらも8ヶ月間仕事が続き、少しずつ表情が見られるようになっていく。A子との関係もぎこちないながら少しずつ距離が狭まっていく様子が窺えた。

2) 経過

以下*状況説明、〔 〕Thの感想、＜ ＞Thの言葉。

#初回面接：「子育てのストレス」について話したいと始まる。がすぐに自分の生い立ちの話になる。最近母親に対して殺意が沸いてきて戸惑うと語る。

＊前月に偶然家族と再会したが、母親に暴言をはかれ激しいやり取りの末ケンカ別れしている。

＃2 急に不安になることがある。目に見えないものに押し付けられる感じ。(無意識に)ハサミを手に持っていた、ということが何度もある。ベランダから飛び降りたら楽かな、と思ったり。「主婦ですか」と言われるのは嫌(A子にも名前を呼ばせている)。結婚願望ない。男性に対して「期待していない」。自分の父親を見ていてそう感じる。[A子の父親である男性との間での傷つきを強く感じる]＃3 妹を見捨てたような気がしている。妹は高校も行けてない。母親から自分は嫌われた。父親は何も言わない。底いもしない。自分が何で殴られるのか、わからなかった。外に何時間も放り出されたこともある。自分が悪いのだと思った。＃4(家族について)内輪でくっついていてる感じ。親戚付き合いもない。＃5 仕事の資格取りたい。「10年後がわからない」不安がある。変わりたい。＜何かひとつ始めてみたらどうかな?無理しなくて出来ること。＞…。(考え込む様子)

＊次回一回面接をキャンセル、その後派遣会社より紹介された会社へ仕事に行く。

＃7 仕事が継続することになった。(前回と変わって明るい表情)＃8 彼(A子の父親)と同棲していた時、妊娠がわかるまで、不安定。寂しくて。彼は慰謝料を払うから二度と会わないでくれといった。ずっと友だちの関係がいい。終わらないから。＃9 コンビニ大好き。妊娠中とかコンビニにいくと気持ちが落ち着いた。＃10 大学生に憧れた。進学したかった。＃15(化粧、マニキュアをしている)爪伸ばすの初めて。生活保護からはずれた。やっと半分自立できた。後は公共住宅に移れば完全に自立できる。結婚はしたくないけどウェディングドレスの写真だけ撮りたい、A子と二人で。＃16 女性起業家とかのセミナーに行きたい。株とかやって儲けたい。＃17 宝くじ三億円当てたい。当たったら、シェルター付きの一戸建ての家が建てたい。

＊職員より連絡。昨日は明るかった、今日は能面のように、日々の差が激しい。嫌な上司がおり、ストレスになっている様子。

＃21 電車に乗ったりすると見られている気がする。手だけ汗。ふるえがある。蕁麻疹、今から思えば、全部上司のストレスかも。仕事辞めようと思う。

＊無断欠勤が続き、会社から事務所へ電話が入る。職員が手続きをサポートし退職する。ハローワークに通い、間を空けず次の仕事が決まる。

＃23 吉本ばなの本が好き。暗くて影があるけど表現豊か。お母さんのおなかの中みたい。…遊園地行きたい。年間パスポートほしい。＜遊園地好きだね＞小学校の頃行ったことがなくて友達に行ったらうそをついた。そのことが印象深く残っているのだと思う。A子にはそういう思いをさせたくないから小さい頃からいろんなところ連れて行きたい。＃31 家出願望がある。ふらっとどこかへ行きたくなる。＃32 赤ちゃんの時はA子かわいかった。今は何だろ、あれ。子どもって小さい時はしっぽふって犬だなんて。大きくなるとネコだよ。自分の気の

向いた時にしか寄ってこない。

＊この頃、A子とYいい感じ。Yに抱っこされ、A子はニコニコ上機嫌。

33 もともと繋ぎだったし仕事12月いっぱいで辞めたい。今年はずっと働いた。<すごいことだね>自分でもそう思う。

＊その後、仕事は欠勤が続きなし崩しで退職。しかしそのことを気にする様子はなく、8ヶ月間仕事を続けたことの方にYは自信を持ったようだ。

2-2 第二期「硬直した感情の動き出し」（X+1年12月～X+2年12月）

～面接の中で柔らかな情感が行き交うようになる～

1) 概観

一年近く就労が続き自信をつける。一方職員事情で事務所が落ち着かない状態であった煽りを受け、次の仕事に就くまでの間Yも不安定になる。一時はYがA子を虐待しており母子分離が必要との話が持ち上がるほど状況が悪化したが、新年度で職員構成が変わると、事務所もYも徐々に落ち着いていく。

その後の数ヶ月は就労が最も安定した時期。事務所でも職員たちと楽しそうに雑談をしているYが見られた。A子にYへの後追いが見られたりもした。面接においても、以前より言葉に情感が感じられるようになり、内容も深まりを見せた。

2) 経過

①事務所内の職員事情によりYが不安定になった時期（# 34～# 47）

職員より、YがA子に手を上げている、事務所に敵対的な態度を取る、A子への接し方が見るに耐えない、早急に母子分離を、等の訴えを聞く。

確かにYはイライラしておりA子と同レベルでやりあい、十分な食事を与えない、手を上げる等の場面も少なからず見られた。一方職員もYに対して感情的に反応しており、双方ともよくない状況になっていた。Yの心情を聞いてみると、Yは「自分との時間を事務所に取られるからA子になつかない。」「なのに（職員は）私が悪いという」と強く訴えてきた。その様子からYの育児に対する不安や自信のなさ、その結果としての嫉妬が職員への反発として現れているように感じた。そこでカンファレンスを開いていただきYの心情と現在起こっている感情的な連鎖について職員とシェアする機会を持った。

その後3月末職員の異動とともに、事務所もYも落ち着いていく。そして施設長より母子分離はしない方向になったとの連絡をいただく。このところ親子の様子も落ち着いているとのことであった。

②再び新しい仕事を始める。最も就労が安定した時期

＊現実面が落ち着き、Yは新たな仕事に就く。

48 スプリングコートこれ（着ていたもの）買った。（タウン情報誌を見ながら）マッサージに行きたい。焼肉の食べ放題にも行きたい。休みの日、A子とホテルのケーキ食べ放題にいった。

＊事務所で、A子がYに抱きついてキスする。甘えるしぐさ。Yも素直に受けている。

52 今見てみたい映画。「アメリ」みたいな映画。「ブリジット・ジョーンズの日記」とか。〔個性的ながら一途な若い女性が主人公の映画、Yの心情を思う〕# 53 誕生日、今朝出勤したらフロアーの一番上の上司に呼ばれて「誕生日おめでとう」とお菓子を渡された。（嬉しそう）# 55 思い出の味はプチフランスパン、小さい時お母さんに買ってもらって歩きながら食べた。今でも見つけると買う。A子と半分ずつして歩きながら食べる# 58（妊娠中のアパートでの生活）昼ぼろぼろで。トイレをあけたら一面ピンクのカビ。夏だし暑かったしつらかった。

＊職員より連絡。A子がYの話を自慢げに話す。Yが褒められると嬉しそう。「パソコンで
きるんだよ」とか、「お仕事もできるんだよ」とか。

59 夢の話①…妹弟の夢を見た。「弟とは親しく話せた。お金本当になかったなら援助するからっていった。でも妹とは隙間がある感じ。あっちも避けていてぎこちない。」その妹のことがずっと気になっている。# 60 自分の分も、A子にはいろいろしてあげたい。七五三、三歳の時もちゃんとした。# 61 母親は嫌い。もう関わらないでって感じ# 62 この夏は何か始めたい。スキルアップになるようなこと。# 63 疲れるし大変だけど仕事行くのは億劫じゃない。＜一年間いろいろ経験したことが生かされているんじゃないのかな？＞そうかも。# 66（児童養護施設の話になる）どこかで人を信じきってない。施設はみんないて楽しいけれど、寂しい。ここを出たら他人ってわかっているから。# 68 おいしいものが食べたい。おいしいケーキが食べたい。

＊この時期食べものの話がたくさん話題に出てくる。

72 携帯の待ち受け画面、A子が描いた「お弁当の絵」。運動会の絵なんだけど、なんで「お弁当」なんだろう…（ウサギの絵やタコウィンナーやかわいいお弁当）＜嬉しかったんじゃないのかな＞そうかな～。A子がいないと生活が成り立たない。（いつも持ち歩いているのだと、A子の落書き付のメモ帳を見せてくれる）

＊面接に入る時、部屋の前でA子が拗ねたので、Yが宥めてぎゅうっと抱っこする。A子は隣の面接室までついてくる。〔やっと後追いをするようになったか、と思う〕

74 仕事の契約が更新できないことになった。私自身に問題があったわけではなく会社の都合だと派遣会社の人に言われた。（淡々としゃべるが、やはり悔しい思いもありそう）資格とか取ってちゃんと就職したい。# 75 夢の話②「悪魔と救世主」…私は欲深いな～と。初めは救世主の方について人間を守ろうとするけれど最後は悪魔の方につく。悪魔の方だと一番上に立つことが出来るから。…三階建ての家に住んでいる。お母さんが森公美子みたいな感じ。お父さんも太ってる感じで。足元は不安定な床。抜けそう。妹はクラリネットをやっていてお母

さんと自分で妹について話している。今、苦しんでいるんだよねって。妹と二人の部屋、10畳くらいの広さなのに入り口（襖）の近くに布団を並べて2枚敷いている自分、それをおかしいなーと思ってる自分もいる。翌日外人のホームステイの人が来て、その人のおじさんも来てなぜか裸でみんなと一緒に風呂に入ろうという。…＜自分の夢どう思う？＞何だろうなー。足元が不安定なのって分かる気がする。今そういう状態だから。#77仕事は昨日まで。まわりから「寂しくなるね」といわれた。

＊初めての円満退社をする。

2-3 第三期「仮そめの自己の崩壊～新たな局面へ」（X+3年1月～X+3年9月）

～内なる変化の欲求に自我が大きく揺さぶられる～

1) 概観

新たな会社での仕事は順調に続いていく。A子との関係も順調。そんな中突然「自分はアスペルガー症候群で今までの生きにくさはこの病気のせいだった」と訴え始める。そして治療のため自分で探したクリニックへの通院を始める。

一方Thとの面接は、一番親密さを増した時期を経て、いったん待機状態に入る。Yへの直接的な援助、狭義の意味での「治療」は医師の手に委ねられ、職員を通しての間接的な援助へとThの役割も変化していく。

2) 経過

#87 今「神様のポート」（Thが紹介した作家の著作）電車で読んでるよ。（つまり通勤しているということ）＜仕事始めたんだね＞うん。（ニコニコ話す）〔仕事始めたよ、ストレートに言わないところがYらしい〕#88（上機嫌）貯金頑張ろうと思う。A子のためだから貯められるんだよね。

＊再び仕事に就き生活リズムが安定する。

#89 A子の防災用品揃えた。＜自分の？＞まだ。まずはA子かな、と思って。

＊職員より、Yの日常の危なげない様子について連絡を受ける。A子との関係も良好。

#96 自分はアスペルガー症候群かもしれない。仕事で調べ物をしていて見つけた。全部自分に当てはまる。職場でばれるんじゃないかって不安でたまらない。＜…仮にそうだとでも堂々としていればいい。できることを一生懸命やればいいだけのことだよ。＞うん。＜そんなに苦しかったのに今までよく頑張ってきたよ、Yさんも褒めてあげなきゃ、自分のこと＞うん。（半べそだったが最後には少し笑顔）〔突然のことに驚くも、自己探求の始まりを感じた〕#98 小児精神病院の先生に電話をかけた。入院していた時のこと知りたくて。どんな診断だったか。今度訪ねてみる。#101 小、中学校、なんで勉強できないんだろうって思っていた。（後

に成績表を施設から送ってもらい一緒に見る。所見には物事に真面目に取り組む様子が書かれている。Y「思ってたより良かった」 # 103 ネットでアスペルガーの掲示板を見つけた。オフ会にも行ってみた。私は普通の方かもしれない〔会に出向いたことに感心する〕。# 104 自信がない。仕事も初めはいいが、だんだん緊張が解けてくると集中力がなくなってミスばかりする。ボーダー（境界性人格障害）っていうのは？ AC（アダルトチルドレン）は？ それも全部当てはまるような気がする。自分がなんなのかははっきり知りたい。# 106 自分はだめなんだって。自分だけがだめなんだって思ってしまう。＜うーん、そう考えちゃうからこそYさん苦しくなっちゃうんだよねあ…＞わかるけど、褒められて育ってこなかったからこうなった。誰も自分を褒めてくれなかった。母親も、父親も。# 107 来週、クリニックの予約行ってくる。アスペルガーのよくわかる先生だっていうから。薬を飲んで治してちゃんと普通に働きたい。＜よく話し聞いてもらっておいでね。＞

＊通院の後、急にYの様子がおかしくなったと職員からの連絡を受ける。（原因は投薬による意識の混迷と思われる。強い薬が処方されている。）

＊職員より連絡…欠勤続き、会社を解雇されることに。ただし残務処理に通勤はしている。〔残務処理が出来ていることに以前のYとの大きな違いを感じる。〕

＊Yは新たな職に就こうといくつか会社を訪問する。失業中Thは避けられ、職が決まりかけると勇んで面接にやって来るということがしばしば続く。しかし主治医から「生活保護を受け治療に専念した方がよい」との助言を受け就労を諦めると、面接が途絶える。そのことについて機を見て話し合った際、Yは面接に来られなかったことを「曜日を勘違いしてた。」と必死で言い募り、今後の面接についても「曜日がわかんなくなっちゃうだけだから。」と続けたい心情を伝えてきた。しかし実際に面接は無理だと感じた。そこでThより＜大丈夫、話しが出来るようになるまでちゃんと時間空けて待ってるからね＞と伝えると、Yはほっとした表情を見せた。以降時間は確保したまま、面接は待機状態とすることになる。クリニックでの治療を外側から見守りつつ、再びYがThとの間での面接が持てるレベルにまで浮上してくる時を待つことが、現時点でできる最大の援助であろうと感じた。

以上、ここまでの経過を持って、YとThとの間の面接過程の考察を試みる。

3 考察

3-1 第一期「社会的引きこもりからの脱却」（X年11月～X+1年12月）

～就労がYの自我を育んでいく～

1) 面接の道標としての就労

面接を始めて比較的初期の段階で、目標として申し合わせた就労が達成された。「就労」を目標に定めたのはここが「生活支援施設」（自立へ導く施設）だからである。Yと初回面接を終

えた当初Thが感じたことは、内面的な気づきや変容を期待する以前に、「幽霊」のようにあやふやなYの輪郭（自我）をもう少し形あるものにしていきたいということだった。そこでまず、現実的にYができることを二人で探し「何かを始める」という共同作業をしながら、二人の関係性を作っていこうと考えた。しかしYは、予想外の早さで仕事に就くことになる。

2) 「変わりたい気持ち」の先行

#5で「変わりたい」との話が出たので<何か（具体的に）ひとつ始めてみたら？>とThが提案している。次の面接は初めてのキャンセルとなるが、その次の回にYは仕事を決めてきた。こちらの期待を敏感に察し応えようとしたのだろう。動きの早さに驚いた。赤ん坊をいきなり外へ送り出すようなものであったので心配もしていたのだが、得意気に仕事に出かけて行くという連絡を職員から受け「習うより慣れろ」もあるだろうと覚悟を決めた。外界との摩擦の中で傷つくことを恐れるよりも、Yが得るものの方に目を向け、面接の場がYの「安全基地¹⁾」となるように支えていこうと思った。

3) 就労がYの自尊心を支える

結果、時期尚早に思われた就労であったが、施設内に引きこもっていた状態から働きに出る、また収入を得ることで生活保護から外れるということが、Yの自尊心を強く支えることになる。そして薄紙を剥ぐような作業とはいえ、Yなりのペースで自我が育っていく過程をThは共に経験していくことになる。

4) Yと共有した内的世界

ここで、Y-Th間で共有された内的世界に視点を移そう。

この時期の面接中のYは、目も合わせず、視線もどこか中空を彷徨っているようであった。キャンセルもなく回を重ねているにも関わらず、ThはYから存在を認められていないような、自分がその場に存在しないような焦燥感をいつも感じさせられていた。Yの語り口は独り言のような呟きで、それに対し「そうだよ」「それでいいんだよ」との気持ちを込めて相槌を打つのだが、どこか一方通行のような気が否めなかった。自分(Th)の存在は、まるで壁打ちするテニスプレーヤーにとっての「壁」、つまりそこに在るだけの「もの」で、「人」としてのレスポンスを何も期待されていないかのように感じられた。

5) 己の存在の不確かさ

面接の中でThが感じさせられた、己の存在の不確かさ、心許なさ、必要とされていないような焦燥感は、Yが日常的に人との関係の中で感じている心情と重なるものだったかもしれない。Yは自分の家族について、「社会的に交流できない不思議な家族」であると言っている。特に母親に対し「人間関係が持てない人だ」と。これはYの現在の姿とも重なる。だからこそ#5「変わりたい」のだとも言っている。

1) 1歳半～2歳前後の乳幼児は母親を「安全基地」として離れる－戻るを繰り返し、時に危険な冒険をし母親から禁止や叱責を受けつつ自分の世界を広げていくといわれている。(Mahler、分離・固体化理論)

6) Yの抱える孤独感

またYの孤独のありようを語る言葉として印象的だったのが、#9「コンビニが好き」という言葉だ。一人で不安を抱えていた妊娠中もコンビニに行くと気分が落ち着いたという。夜中でも明るくて、人の気配がする、けれどそこにいる人々はみな他人であり、言葉を交わすことがない。そういう場が孤独を癒してくれるというのだ。また#2「結婚願望ない」さらに#8で彼（A子の父親）との関係が語られた時「ずっと友達の関係がいい。終わらないから」といっている。しかしあえてそう言い切るYの様子からは人との関わりを恐れる一方、言葉とは裏腹に人との親密な、終わらない関係を強く求める心情が滲み出ているように感じられた。

7) 確固たる守りへの希求

また#17「シェルターつきの一戸建ての家が建てたい」という言葉も印象深い。#31「ふらっと何処かに行きたくなる」という所在無さの裏返し、強固な壁に守られたいという心情の表れとも取れる。先に述べたように「壁」として扱われることをThは本意と感じていたのだが、Yが求めていたのは正真正銘自分を守ってくれる強固な「壁」であったのかもしれない。

3-2 第二期「硬直した感情の動き出し」(X+1年12月～X+2年12月)

～面接の中で柔らかな情感が行き交うようになる～

1) Yを巻き込むある事件

この期の始めに、Yが職員間の感情的な軋轢に巻き込まれるという事態が起こる。不安定になったYがA子に当たりだし、職員の同情がA子に集まった。そして事務所の雰囲気自体もYを責める様になっていく。YからA子への暴力も助長され、関係緒機関を巻き込み二ヶ月近くこのごたごたが続いた。

ここで面接経過とは少々ずれるが、この時間問題とされた「虐待」と「母子分離」について考察するとともにことの顛末について述べる。

2) 児童虐待と母子分離をめぐる問題への介入

当施設が児童福祉施設である以上「母子分離」はこの親子の「施設退所」を意味する。

この時Thは比較的輪の外におり様子を窺っていたのだが、児童相談所へ「母子分離」の方向で介入を求めるなど、双方感情が入り乱れてあまりに混迷してきたので、施設内でのケース検討会を呼びかけた。その場でThが述べさせてもらったのは以下の3点である。

- ① 現時点でのA子への養育の不十分さは「虐待」と括ってしまう以前にYの育児経験不足、母性の未熟さと捉える方が適当であろうこと。
 - ② 事務所の対応がYのA子への暴力を助長してしまっている可能性があること。
 - ③ 人としてのみならず母としてのYを育てていく必要があるのだということ。
- ③は、A子にとってもそれが最良の援助であろうと考えてのことである²⁾。Yは自分を「お

母さん」と呼ばせていない。また常からA子に年齢不相応な要求をしがちである。それがまた職員の不興を買うのであるが、確かにこれでもかとA子を背伸びさせ頑張らせている様子は見えて辛いものがあった。だがYにとってはそれが目いっぱいの子育てだったのだと察する。自分が受け入れられる体験をしていなければ感情的に子どもを受け入れることは困難であろう。まずYには「努力のしどころが違うよ」と暖かく教諭す父のような母のようなあるいは姉のような誰か、つまりA子を共に育ててくれる家族的な環境が必要なのである。そうして初めて虐待の「世代間伝達³⁾」を断ち切ることが出来るのではないか。

3) 心理職として考慮した二つの観点

さて、この時Thが心理職の立場で心がけたことは以下の二点である。①虐待者（この場合はY）の状態像の把握②場の心理的力動の見極め、である。

児童虐待への介入に際して考慮すべき観点のひとつに、虐待者の抱えている病理性の水準がある。水準1：自ら虐待を自覚している状態、水準2：子どものことで困っている状態、水準3：虐待を否定し、援助を拒否する状態、以上3つの水準である。（安部、2001）

Yのこの時の状態を上記の水準に照らし合わせて見ると、水準2の「子どものことで困っている状態」に当てはまる。自身の内的葛藤には気づいてはいないが、困ってはいるので、援助を受け入れる余地はあるというところだ。前項でも述べた通りこの段階で施設内での援助を諦めてしまうのは早急過ぎるであろう。ましてこの時は、職員の対応がYの自尊心を傷つけ、嫉妬心を煽っていた。冷静に考えればわかりそうなもののだが、各々の職員の内的葛藤が思わぬ形でYを巻き込んでおり事態を混沌とさせていた。様々な思惑が絡む集団の中でこの本質を掴むことは難しいが、人が集まるところ必ず生じる「場」の心理的力動を見極めることも心理職の役割のひとつとなろう。

4) 再就労による親子関係の安定

さて、新年度になり、事務所の顔ぶれが一新し、落ち着きを取り戻したYは新たな仕事に就く。この数ヶ月は就労が安定し、Y自身も、またA子との関係も良い方向への変化が目に見える形で現れた。その一つとしてそれまでYの傍からさっさと離れていったA子が、面接で別れる時などに後追いをさせるようになる。この様子を見た職員からも「やっ和后追いするようになりましたね」と喜びの声が聞かれた。まだごちなさはあるものの、YからA子へのスキン

2) 山崖（2001）は、虐待は親にとって修正不能の事態ではなく育ち損ねた自尊感情を育むことで変化するものであり、さらに母子施設における実践研究において母子で共にいることが関係性の改善を一層促進したと報告している。また母子が共に安定するには母親自身が守られた中で大切にされることが必要であると述べている。

3) ここでは以下の意味において用いている。Bowlbyによると人は児童期に築いた養育者との愛着体験を通してその後の対人関係、認知、自己評価の仕方を形成するという（内的作業モデル）。また親は子どもの愛着信号（泣く、笑う）に触れると子ども時代の自分のそれへの親の反応を無意識に想起する。そこで親の内的作業モデルが適応的でなく防衛的であった場合、子どもの信号への反応も不適切で防衛的なものとなり、そういった反応を返された子どもの内的作業モデルもまた不適切で防衛的になっていく。そしてこの不適切な関係性が下の世代へ順次繰り返されていくという悪循環。

シップも見られた。

5) Thへの「関心」と「甘え」の表れ

またこの時期よく読書もしている。Thに好みの作家を聞いてきたり、Thが推薦した作家の作品を読んで感想を聞かせてくれるなど、Thへの関心をようやく見せてくれるようになる。Yから初めて「関根さん」と名前呼びかけられた時はさすがに嬉しかった。また#48「マッサージに行きたい」「焼肉の食べ放題に行きたい」#69「ホールのケーキを買って帰った」など、自分の欲求や甘えを満たそうとする話題を熱心に語るようになり、生活を切り詰めるだけ切り詰めて抑制的だったYが程よい感じで緩んできたことを感じさせた。

6) 社会生活への自信

就労については、この年の12月末で契約期間の満了で退職となるのだが、初めて皆に送られての円満退社が出来た。このことはYに大きな自信を与えることになる。

その後も多少のたわみはあったものの、大きく崩れることはなく、Yは次の仕事先を選ぶ。

7) 両価的葛藤の現れ

次に視点を転じ、Yの内的世界を見ていきたい。

この時期、面接の内容も以前に比べると踏み込んだものとなり、両価的な葛藤が語られる。それまで出てこなかった母を慕う気持ち#55「思い出の味はプチフランスパン…お母さんに買ってもらって…今でも見つけると買う…」が語られる一方で、#61「…もう関与しないでって感じ」と拒否する言葉も語られる。また、#59 夢①「弟とは親しく話せた…妹とは隙間ある感じ。」を見て、高校へも行かせてもらえなかったすぐ下の妹へ、自分は妹を置いて逃げて来たのだという後ろめたい気持ちをずっと持っているのだと、初期の頃とは対照的に情感を込めて語っている。またYにとっては心の拠り所であろう児童養護施設に対し「…毎年父の日母の日にお花を送っている」「園長先生からお礼の電話が来る」と親愛の情を語りつつ「卒園してからも休みの日とかずっと遊びにいく子とかもいる。それって施設に依存してるってことだよ。施設に戻って来てたら世界が広がらないよね。」と、その情を「依存（良くないもの）」として表現し排除しようとするようにも語られている。

8) 悪魔と救世主の夢一変容の兆し

さらに#75で2つ目の夢が語られる。夢②の中では、救世主となり人間を守ろうとしたけれども、最後は欲望がまさり悪魔につく、という前半に引き続き、後半部分では、不安定な床、伸び悩み苦しんでいる妹（あるいはY自身）、広い空間で縮こまっている自分たち、そこへ異質な存在と入浴するという状況、が語られていく。夢の中で救世主－悪魔という二律背反の世界が創られ、Yは救世主になるよりも自分の欲求に従うことを選択する。二元世界ではあるけれども怖がって自分の欲しいものに手を伸ばすことを躊躇していたYが欲求に従い「一番上に立つ」ため悪魔の側に付いたことにThは関心を持った。「一番上」また「三階建ての家」とはYの特徴である上昇志向や非現実的な理想の高さを思わせる。そして太った両親により抜けそ

うな床、クラリネット（息を吹き込む楽器）で苦しむ妹からは意に反し地面（現実あるいは身体性）へ引きずり落とされそうなYの不安を感じた。最後の入浴のエピソードでは、風呂は変容の器を思わせ、変化を求める自分（外からの侵入者）とそれに戸惑う自分との間の葛藤が連想された。いずれにしろ、一連の流れの中でYの中に閉じ込められていた情動がゆるゆると予震のように動き出していたのは確かだと思う。

次の期の頭で#86「A子の防災用品を揃えた」と特に脈絡もなくYが言うのであるが、こうして改めて前後のつながりを考えていくと、これから起こる内的な揺れに備えての行動だったのではないかとすら思える。葛藤が生じ、内的情動が動き出す。逆に言えば、それらを抱えられるだけの器（自我）がYの中で育ってきたともいえるであろう。

3-3 第三期「仮そめの自己の崩壊～新たな局面へ」（X+3年1月～X+3年9月）

～内なる変化の欲求に自我が大きく揺さぶられる～

1) 自己探求の始まり

新たな会社での仕事は順調に続いた。自分が作ったというパンフレットを喜々として見せ「持って帰っていいよ」と渡されることもあった。そんな中、突如として#96「自分はアスペルガーかもしれない」と訴えだす。以降堰を切ったようにそれまで語ることのなかった負の自己イメージ#96「小さい頃から人と同じことができない」「集中力が続かない」「自信がない」#101「すごく成績悪かった」「だめな人間だ」等を相手構わず語るようになる。Yの急激な変化、さらに思いがけない「アスペルガー」という言葉に職員たちは動揺する。Yのこの揺れは唐突のようでもあるが、二期の終わりの内的過程を考えれば、必然であったともいえる。

2) 生きにくさの背景―被虐待体験の落とす影

ところで、自分のこれまでの生きにくさが器質的な障害のためであるというYの認識について少し考えてみたい。

Yは自分を「アスペルガー症候群⁴⁾」であると言い切っている。しかしそれは素人判断であり、精神医学的診断基準（DSM-IV-TR⁵⁾による）に照らしても基準を満たすものではない。しかし、言葉で語るほどは洞察に至らない感じ、比喩を言葉通りに受け取るところ、対人関係の不器用さ、視線の合わなさ等Yの示す特徴のいくつかは器質的なある種の発達障害の特徴と重なるものだ。

一方、Yの「生きにくさ」には被虐待体験が大きく影響していることも忘れてはならない。

4) DSM-IV-TRでは「アスペルガー障害」。広汎性発達障害に含まれる。社会的相互性の質的障害。認知能力、生活能力に全般的な遅れはない。

5) アメリカ精神医学会発行「精神障害の診断と統計マニュアル」(Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders)

虐待研究の最近の動向では、被虐待児が示す様々な行動様式および心理的特徴を「愛着の形成が阻害されたために生じる障害」という視点により説明している。「愛着」とは、発達初期の主たる養育者との間で形成される基本的信頼関係の素である。この視点から改めてYの状態像を見てみると、まず先のDSM-IV-TRに照らした場合「反応性愛着障害⁶⁾」の診断基準を満たす。また心理的關係性の問題として捉え、Yの内的変容過程に照らし合わせていくと、面接の初期でThが感じさせられた「一人取り残される感じ」「ものとして扱われる感じ」－道具的対象化（森田、2001）の状態から、徐々にTh個人に関心を向けていく一連の過程が、被虐待児への治療的関わりにより生じる対象関係の変化の特徴⁷⁾を非常によく現わしている。そのように考えるとYが呈する一見発達障害のようにも見える行動様式また心理的特徴はやはり反応性の「愛着障害」として捉える方がより適切であるように感じる。しかし生来の障害による乳幼児期の育て難さが母親からの虐待を助長させ、さらに愛着の形成を困難にさせた可能性もあり、両者が複合的に生じている場合をも頭の隅に入れておく必要がある。

4) 心の傷の深さ－「愛着」の拡散

なおこの時期、生活場面でYは、誰彼かまわず自分の障害について話し出すという行動に出ている。精神的に追い詰められた状況下で人の道具的対象化が出現したわけである。人を人として認識せず「誰でもよい」とするYの行動に、やはり特定の養育者との間でお互い心地よいと感じる関係性を育ててこられなかった背景が透けて見え、Thは苦しいような切ないようななんともいえない気持ちを味わう。

なお、後のクリニックでの医師の診断は、Yの問題の中核にある種的人格障害としている。子ども時代の被虐待体験は心の働きを抑制し、心の成長を妨げる。よってその虐待体験の中で生じる「恨み」や「怒り」その裏返しである「甘え」「抑鬱」等の感情は自身の中でうまく整理がつけられぬまま、混沌とした鬱屈として成人に至るまで残されてしまう。そしてその整理の付かなさ（洞察能力の弱さ）が人格障害を顕在化させる要因となるとの報告もある。（Fonagy, Steel, & Steel, 1991）

Yは、自身の生きにくさの背景にある虐待体験を、語りはするもののリアルな心の痛みとして自我に統合するには至れずにいる。それでもなお何とか自分の形を掴もうと、自身の問題を器質的な発達障害として捉え自分なりに整理し位置づけようとしたのだと思う。容易に触るこ

6) 対人的相互作用のほとんどを、発達の適切な形で開始したり反応したりできないこと。あるいは拡散した愛着で、適切に選択的に愛着を示す能力に乏しいこと。その判断条件として、情緒的、身体的欲求が無視され、かつ愛着形成の阻害された状況にあり、かつ広汎性発達障害の判断基準を満たさないこと、があげられる。

7) 森田(2006)は被虐待児、特にネグレクトを主訴とする子どもに接していると、一人取り残されたような感じを持たされることが多い(愛着不全に起因)が、繰り返されるアプローチを体験することで、彼らは他者を意識し退行的、依存的な行動を示すようになり平均的な人間関係を回復していくと述べる。また彼らに対するには人間に興味を持つところから始めねばならず根気のいる関わりが必要とされる、とも述べている。

とができないほどにYの押し込められた感情、心の傷は深いということなのだろう。

5) 現実生活の崩れ—水面下での内的成長

ところで、YとThとの関係は、この時期一番親密であった。面接の開始を心待ちにする様子が見られたり、逆に面接の遅延に不安そうな表情を浮かべたりと、感情の動きが態度に素直に現れていた。それだけYの不安が高まっていたということでもあろうが、不安な時にTh（特定の他者）を求めるという適応的な関係性がYの中に徐々にではあるが育ってきていたとも言えるだろう。

一方# 107の後、アスペルガー症候群を診てくれる医者としてYが求めたクリニックへの通院を機にYの様子がさらに変化する。処方された薬の影響で意識が朦朧とし蒼白い顔で目にも生氣がなくなる。A子の食事や入浴の世話もしなくなり、職員が代わりに世話をする状態が続いた。

6) 社会生活の維持—自我の成長

しかしながらとことん崩れていくという様子はなく、欠勤が続き解雇となりながらも仕事の残務処理に出勤して行ったり、新しい仕事を探してきたりと最低限ではあるが社会生活を送れていた。一見するとぐずぐずに崩れていきそうなYなのだが、その実ぎりぎりのところで踏み留まれる強さを保ち、社会人としてすべきことをなんとかこなしている様がYの自我の成長を窺わせた。

そしてその後、「治療」という形でYへの直接的援助はクリニックへ移行し、日常場面に関わる職員への助言という形での間接的な援助へThの役割も変化していくことになる。

4 Yのプロセスのまとめ

1) 自我が育まれる過程

全体を三期に区切り、Yのたどって来たプロセスをまとめた。「幽霊」のようだったYが失敗を繰り返しながらも就労に挑み、社会の中で揉まれながらだんだんと自信をつけ、社会的スキルをも身につけていく。その過程である程度までは自我の力が育ち、内的な必然性に押し切られるように自分の心の問題を明らかにしたいという欲求が浮上してくる。そしてその欲求のままに外部治療機関へつながる、という一連の流れである。

その中でThは、Yとの間で安定的な関係性を育てつつ、面接をYの安全基地とし外の世界への探索、つまり「就労」を支えた。外からの刺激と中からの関係性によって変容の器となる自我が徐々に育っていったのだと思われる。

2) Y—Th間に柔らかな情感が生じる過程—一人としての輪郭ができる

そのことをY—Thで共有した内的世界の変化として捉え直してみると、当初Yにとって人ではなく無機質な「壁」として扱われたThが、面接を重ねるうちにだんだんと人として認識

され、二人の間に柔らかな情感が行き来するようになっていく過程であったと言えよう。セラピストはクライアントの心の鏡であるといわれる。当初YはThを鏡ではなく何も映すことのできない「壁」として扱った。それが徐々に磨かれ臍気ながらYを映すようになっていく。それはThとの間に人間的で柔らかな情感が行きかうようになることと同義であり、あやふやだった自身の存在が輪郭を持ち、Yの中で形になっていった過程とも言えるだろう。

Ⅲ 次のステージへの展望

1 心理臨床研究の新たな視座―「場」を捉える―

心理臨床の事例研究では、クライアント―セラピスト間の関係性の推移を中心に考察が行われる。そしてその関係の中で生じること、あるいはこの関係の質の変容が、クライアントの適応力のあり方や改善に影響をもたらしていくと考える。(村瀬、2004) 本論においても、筆者は上記の視座に照らし合わせ事例を検討してきた。

ところで近年、そういった関係性の変容過程に留まらず、そこにあるゲシュタルト、全体を観察していくことの重要性が指摘されている。(村瀬、2004) クライアントの治癒と成長にとって、様々な「こと」や「人」が時に重要な治癒機転をもたらすことが少なからず生じているからである。

2 「生活の場」の果たす役割への期待

心に傷を負い心理的発達が遅れている子ども、特に被虐待児(者)に対しては、日々の何気ない営みの中にセラピューティックなセンスの込められた「生活の場」があることが重要であると続けて村瀬は指摘する⁸⁾。それらを踏まえ、Yのケースを見た時、やはりこの親子を抱える「生活の場」＝母子生活支援施設の重要性を改めて感じるのである⁹⁾。

狭義での「治療」が医師の手に渡った本論文後の次なるステージにおいては、傷ついた子どもが傷つきつつある子どもを抱えているようなY親子に対し、二人が生活している場である施設が、あるいは施設を取り巻く社会資源、それらを包括するコミュニティが親子を支える「生活の場」としてどこまで機能してけるのかが我々に与えられた課題となろう。言い換えれば、広義での「治療」、別の言葉を用いれば「育ちの場」として期待されているのである。とはいっても何も気負うような特別なことを述べているのではない。日々の当たり前の暮らしの中の、ごく自然な息遣いや人としての暖かさ、志の中にこそ「生活の場」の果たす役割の真髄があるように感じる。

8) 児童養護施設における研究では、西澤(2001)や藤岡(2001)らによっても同様のことが提唱されている。「場」の特性は異なるが踏襲するべき点は少なくないと思われる。

9) 母子生活支援施設の先行研究では山崖(2002)が母子臨床の立場から被虐待体験を持つ機能不全母親の母性を育てるために施設が母子を抱える機能を具えることの必要性を述べている。

Ⅳ 心理職の仕事—スタッフとしての役割

さて最後に、再びYの事例に視点を戻し母子生活支援施設における心理職の仕事のいくつかの側面を概観しまとめとしたい。

1 「地」と「図」を見極めていくこと

心理面接において一般に、面接場面を「図」、日常生活場面を「地」として比喻する。施設での心理臨床の場合「地」と「図」が同じ平面上で非常によく見渡せる環境にある。不慣れなうちは混乱させられることも多々あろうが、それを逆手に取れば、面接の効果がどう現実場面とリンクしていくのかが手に取るようにわかる願ってもない環境ともいえる。

時として内的な変容は外的な変化とかみ合わないものである。内的には確実に変容しているものの、それが行動に現れなかったり、逆に準備が十分でない段階で行動を起こして行き詰まり、状態が悪くなっているかのように見られたりもするものである。そしてこのことは日常生活を共にする施設職員を大いに混乱させる。行き違いが高じれば、Yの事例の二期で起こったように関係諸機関をも巻き込む騒動を引き起こすことにもなる。あるいは一見とても順調なように見えて、実は内的には危機的状況を抱えている場合もある。まず心理職がすべきことは、施設という「場」の特性を見極めた上で、クライアントの心の営みをしっかりとトレースし、現実場面とつなげて理解していくことであろう。

2 「生活の場」を守ること—伝える力の重要性

第二に、いたずらに職員が混乱し、不安が高じないように、全体として何が生じているのかを正しく伝達していくことが必要である。「場」の心理的力動を見極めること、また起こっていることを職員が理解できる言葉で正しく伝達する力も必要となろう。さらに何を伝え、何を心に留めるのかを、「場」のキャパシティを推し量りつつ判断していくことも必要である。これらのことはクライアントの内的変容過程を守るだけでなく、施設の機能、また職員の精神的安定をも守ることにつながる。「場」を構成する人々の安全、安定なくして「生活の場」が有効に機能することはもとよりあり得ない。クライアントを守るためにも、「場」を構成する職員のモチベーションの維持、達成感向上のためにも、心理職の果たす役割は大きいと感じる。

3 共に歩む援助者であること

ところで、筆者もまた施設職員であり、他職種の職員とそれぞれの専門性を分かちこ・ワーカーとして、利用者へ提供するサービスの質の向上に共に尽くすものである。この、福祉職と心理職それぞれが、関わり「質」の違いを互いに理解し認めた上で、同じ目的に向かって共に働くもの、という協働意識を持てるか否かが心理職配置の成否を分ける大きな要因なのではないかと筆者は感じている。

さて、Yはようやく他者に対して関心を寄せるようになり、自身へも向き合おうと恐る恐る一歩を踏み出したところである。「育ち」の過程はこれからも続く。状況に応じ筆者の役割や援助の方法も変化していくが、今後とも時間軸空間軸の接点で起こっている内的外的変化、Y親子の成長過程を見極め、他の施設職員と協働しながら援助を続けていくつもりである。そして、Y親子の成長にとって適切な援助が受けられる「生活の場」が保たれるように、またYの「内面的な成長を支える場」が確保されるように、さらにはA子に対しても適切なケアがなされるように、関係者各位、関係諸機関とも協力調整のうえ、手を尽くしていきたいと考える。

文献

- 松原康雄編著「母子生活支援施設－ファミリーサポートの拠点」エイデル研究所 1999
- 山崖俊子「機能不全母親にとっての母子生活支援施設の抱える機能」日本保育学会大会発表論文抄録 (54) 2001p. 422-423
- 山崖俊子「児童虐待防止における母子生活支援施設の役割」日本保育学会大会発表論文抄録 (55) 2002p. 622-623
- 山崖俊子「ある母子生活支援施設における子ども虐待の実態と母親自身の被虐待体験」小児の精神と神経 42 (4) 2002p.273-281
- 安部計彦「ストップ・ザ・児童虐待」ぎょうせい 2001
- 村瀬嘉代子「心理的援助と生活を支える視点」臨床心理学 4 (2) 2004p. 161-166
- 藤岡孝志「児童虐待と愛着障害の関係性に関する研究」日本社会事業大学紀要 (48) 2001p. 243-258
- 西澤 哲「子どもの虐待への心理的援助の課題と展開」臨床心理学 1 (6) 2001p.738-744
- 西澤 哲「虐待を受けたある幼児とのプレイセラピー－トラウマプレイセラピーのあり方の模索－」子どもの虐待とネグレクト 3 (2) 2001p. 234-242
- 森田喜治「児童養護施設と被虐待児」創元社 2006
- Fonagy, Steel, & Steel, 「Maternal representations of infant-mother attachment at one year of age」Child Development, 62, 1991p. 891-905
- Fonagy, et al. 「The relation of attachment status, psychiatric classification, and response to psychotherapy」Journal of Consulting and Clinical Psychology, 64, 1996 p. 2-31
- 数井みゆき他「アタッチメント－生涯にわたる絆」ミネルヴァ書房 2005
- Bowlby, J. 「母子関係の理論Ⅰ～Ⅲ」岩崎学術出版 1981
- Bowlby, J. 「母と子のアタッチメント－心の安全基地」医歯薬学出版 1993
- M. S. Mahler 他「乳幼児の心理的誕生－母子共生と固体化」黎明書房 1981
- アメリカ精神医学会「精神障害の診断と統計マニュアル」DSM-IV-TR 医学書院 2003